

# 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化に ついての個性記述的検討

- 3 事例の縦断的量的データと回想的面接調査による質的データから -

神谷 哲司\*

## An Idiographic Approach to Change of Parental Role Concepts in Married Couples

KAMIYA Tetsuji

キーワード：親役割観，夫婦，育児期移行，家族発達，個性記述

Key Words : Parental Role Concepts, Marital Relationships, Transition to Parenthood, Family Development, Idiographic Approach

### 【問題と目的】

育児期移行にともなう夫婦の親役割観の変化については、これまでに、育児期になると男女とも乳児の養育役割を母親に比重の高いものと認識するようになり、総体的には育児期を通してその差違を大きくする傾向にあること(神谷・菊池, 2004), また, 夫婦で親役割観が類似していると子育て意識も同程度であることと, 夫婦間で親役割観が伝統分業的な場合, パートナーからの影響と子育て意識が関連していることが明らかとなった(神谷, 2004)。そこでは, 特に「子育て意識」が意味する内容について, 平等(両性両立)的な親役割観を有しておらずとも, 夫婦間の相互性によって高めることが可能であることが示されていた。それは「一緒に子育てをする」という認識が必ずしも「父母同等に子どもとかかわる」ことを意味するわけではないことを示唆するものであろう。また, 乳児の泣き声に対する父母の知覚と夫婦の関係性について検討した研究(神谷, 2005)では, 高リスク乳児の泣き声についてネガティブに知覚する母親は育児ストレスが高く, またそのパートナーは子育て意識が低いことが示されており, 夫婦の関係性において子ども側の気質的な違いが関連していることが示されていた。このことはまさに, 子どもをも含めた家族成員の相互性が育児期移行における家族発達を明らかにするためには重要であることを示しているといえよう。

ところで, ここでいう家族成員の相互性という言葉は, 家族システムにおいて各々の成員が互いの相互交渉を通じて影響を与え合っていることを意味しているが, 先述したこれまでの研究は, この家族システムの循環性の一部分を定量化し, 記述的に切り取ってきたに過ぎない。氏家(1996)は,

---

\* 鳥取大学地域学部地域教育学科

こうした線形的回帰モデルの限界を踏まえたうえで、Chess & Thomas (1980, 1984)のトランザクション・モデルを適用し、親になるプロセスを明らかにするため、母親のインタビューを行っている。日常的なシステム内の相互作用において、ある出来事は、その出来事をどのように意味づけ、評価するかという問題をも含めてシステムの中で複雑に影響を及ぼすのであるが、ここで、トランザクションとは、このシステムの中の小さな要素が互いに連鎖反応的にある出来事の意味を変化させたり、新たな意味をつくり出しながら全体としての変化を引き起こしたりするようなシステムの動的な性質のことを意味している。そこでは親の知覚 = 評価様式に焦点を当て、その決定因として、個人の体験に基づいた価値システム、文化 = 社会的価値システム、現在の条件の3つを挙げている。これらの3要因の相互関係から、個人はある出来事の主観的意味をつかみ取るものであるとし、その意味づけは個人の振る舞いに強く影響し、さらにその個人の振る舞いや、それに対する環境の反応は、知覚されるべき新たな現実としてもう一度このモデルに組み込まれるものであるとされている(氏家, 1996)。

こうした研究の枠組みは、「統計的操作によって再構成された事実は、現実によってテストされなければならない」(氏家, 1996)と述べられていることに現れているように、発達研究の方法論に関する議論において、昨今では定量的データのみで発達という現象にアプローチすることへの限界と反省がなされるようになってきていること(やまだ, 1995)に対応する。

そこで、本研究ではこれまでに量的データによって得られていた知見について、質的データと照合させることにより家族発達における家族成員の相互性やトランザクションの様相について描き出すことを目的とする。具体的には、これまでの研究(神谷・菊池(2004)と神谷(2002))において新婚期に協力が得られており、現在子どもを複数持つ育児期にあたる3組の夫婦を対象に、数量的な追跡データを収集するとともに、併せて調査的面接を行うことによってその変化の質的な側面について個性記述的に検討する。その際、特に乳児養育役割の変化として育児期を通じて母親に比重を高くすること、そこに子育ての性別観が関連しているのではないかとの知見、および乳児の泣き声が夫婦の共育意識に関連していたことから、夫婦の親役割行動の実際や親役割に関する性別の問題、さらに子どもの気質的な側面に焦点化したいと考える。

## 【方法】

### 1. インフォーマント

今回のインフォーマントは、これまでの調査に協力を得られていた夫婦3組である。3組とも神谷・菊池(2004)における親役割観に関する質問紙調査に夫婦とも協力が得られており(家族AとBは新婚期、家族Cは育児期)、うち2組(家族BとC)の男性は新婚期に、乳児の泣き声に対する認知の研究(神谷, 2002)に協力が得られている。また3組とも、家族構成が類似しており、すべて核家族、年齢は夫婦ともに30代前半、子ども数は2人でいずれも男児であった。面接当時の具体的な各家族のプロファイルは以下のとおり。

#### 〔家族A〕

夫33歳、妻34歳。第一子(男児)3歳4ヶ月、第二子(男児)1歳。97年に結婚。妻は第一子出産後には育児休暇を取り、仕事を続けていたが、第二子誕生の5ヶ月前に退職。現在専業主婦。夫は公

務員であり、これまでに転職歴はなし。

〔家族B〕

夫32歳，妻31歳。第一子(男児)3歳5ヶ月，第二子(男児)1歳。96年に結婚。結婚以前，このカップルは遠距離恋愛であったため，妻は結婚前に一度退職。しかし，結婚後居住地にあった同じ会社の支店に入社。2年余り仕事を続けていたが，体調を崩し退職。その後 職業訓練校に入校するが，在校中に第一子の妊娠が判明。その後，専業主婦。夫は会社員営業職であり，これまでに転職歴はなし。

〔家族C〕

夫33歳，妻32歳。第一子(男児)6歳5ヶ月，第二子(男児)4歳5ヶ月。96年に結婚。結婚後，夫は銀行員，妻は医療事務員として夫婦ともに就労していたが，妻は第一子の妊娠を機に退職。その年，夫は転職を余儀なくされ，メーカーに転職，その4ヵ月後また，銀行業務へ転職。さらに04年に別の銀行へと転職。同年，専業主婦であった妻も，第一子の小学校入学を機に販売業(パート)に就職。

## 2. 調査方法

上記3家族に対して，事前に調査協力依頼書を送付し，快諾を得た。調査方法は1)質問紙調査，2)泣き声調査(家族B，Cのみ)，3)半構造化面接である。質問紙は事前に郵送し，家庭訪問時までに記入をお願いした。泣き声調査と面接については，筆者自身が家庭訪問によって行った。調査日時は2004年の5月上旬～6月下旬で，夫婦，子どもがともに在宅する日中であった。なお，面接調査の依頼の際に使用した文書や一連の手続きについては鈴木(2002)を参考にした。

### 質問紙調査

質問紙は，神谷・菊池(2004)で使用した親役割観に関する質問紙(以下，質問紙A)と，神谷(2004)で使用した質問紙(以下，質問紙B)の2種類である。質問紙Aには2組(家族AとB)が新婚期に，1組(家族C)は子どもが一人の時点(育児期)に協力を頂いており，データの照合が可能であった。さらに，夫婦の親役割観異同についても検討するために，質問紙Bにも記入していただくこととした。2種の質問紙は，調査依頼への快諾の後，面接日時を尋ねる調査票とあわせて送付され，家庭訪問時までに記入していただくよう依頼した。

### 泣き声の知覚・認知に関する調査

泣き声の知覚については，神谷(2002)と同様「耳ざわりな」「いらだつ」「気にさわる」「いやな」の4項目，及び神谷(1999)で用いた育児ストレス尺度(加藤・津田，1998)についても尋ねた。手続きの詳細は神谷(2002)を参照のこと。

### 半構造化面接

面接については，夫婦双方を同時に面接するジョイント・インタビューを行った。ジョイント・インタビューには1対1の面接よりリラックスしやすく，ラポールが形成されやすいこと，また，面接中に繰り広げられるインフォーマント間のコミュニケーションから，両者の関係性についても観察が可能であることが知られている(鈴木，2002)。しかし反面，1対1の個人面接とは異なりインフォーマント間の関係から発話内容がゆがんだり，どちらか一方のみの発話に偏ったり，率直な

意見が聞けないなどのデメリットが挙げられている(Arksey & Knight,1999)。しかし、本調査の依頼段階において、調査結果をフィードバックすることに承諾・依頼を受けており、そのため、個人面接で行ったとしても回答に歪みが生じたり、防衛的になったりするなどの態度は予想される。また、親役割観の相互調整のプロセスについて描くためには、むしろ夫婦のコミュニケーションを面接に介在させることで有効な知見が得られるのではないかと考えられた。そこで、むしろ、本調査では、ジョイント・インタビューを行うことによって夫婦双方のコミュニケーションにも着目することで、夫婦の親役割観や子育て意識に関する語りについて検討したいと考える。

面接時の質問について、親役割行動の実際や親役割観の変化について明らかにするため、「第一子出産後の子育てについて父母それぞれがどのように子どもにかかわっていたか」を系時的に語ってもらうとともにその時々親役割観についても語ってもらった。また、「子育てを大変だなあと感じたことはありますか、またあればそれはどんなときですか」「子育てをするようになって、子育てのイメージは変化しましたか」「(質問紙で尋ねたような)親役割についてどのように考えたり、感じたりされていますか」「『子育ては夫婦で平等にすべきだ』という考え方に対してどう思いますか?」「『子育ては母親にしかできない』という考え方に対してどう思いますか」「お父さんでなければ、もしくは、お母さんでなければできない子育てがあると感じたことがありますか」などの質問を準備して面接に望んだ。面接は基本的にインフォーマントが話す内容の流れにそって進められ、会話が途切れた際に上記の事前に準備された質問を尋ねた。また、適宜発言の真意を確認するためのフォローアップの質問も行った。さらに、できるだけ誘導質問にならないように配慮するとともに、親役割観について面接者自身は特になんらかのイデオロギーを持たないことを伝え、筆者の側から親役割行動に関して何らかの評価をするような発言・態度は控えた。面接はすべて、インフォーマントの許可を得て録音された。

### 3. 測定データ

#### 質問紙項目

質問紙A、Bについて、今回取り扱った変数は次のとおり。質問紙Aの親役割観のうち乳児養育役割、表出的役割、手段的役割、質問紙Bより親役割観の個人的認知、家庭内性差観、子育て意識、及び親役割観への影響認識のうち「パートナー」の項目である。質問紙Bにおける親役割観の個人的認知については、神谷(2004)で分析された育児期夫婦のデータ(男性224名、女性254名)に今回の3家族のデータを入力し、改めて個人の親役割観のタイプを、Q技法、クラスター分析、ward法によって算出した。その結果、神谷(2004)で見られた結果と齟齬はなく、男女とも3つのクラスターに分類することが妥当であると判断された。

#### 泣き声調査

泣き声の知覚については、神谷(2002)と同様、リスク条件ごとに得点を算出した。また、育児ストレス尺度(加藤・津田,1998)は因子ごとに平均点を算出した。

#### 面接記録

録音された面接は筆者自身が逐語記録を作成した。録音時間は3家族とも70分前後であった。作成された逐語記録を数回読み、親役割行動、親役割観、またそれらにかかわるとされる性差や子ども、パートナーについての語られている部分を抽出し、文脈を歪めないように補足、注釈をつけ

ながらエディティングし、トランスクリプトを作成した。またその際、なにを話したかだけではなく、どのように話したかということも重要であることから、できるだけ語り口を忠実に再現し、雰囲気や伝わるように努める(佐藤, 1992)ことが肝要と思われたため、補足や注釈にはすべて筆者が( )で付記するようにし、会話中に笑いが生じた場合には(笑)を挿入した。次に、親役割観の変化と親役割行動に関して述べられた部分から、そこに関連すると思われるトランスクリプトの部分前後に並べ替えながら、全体として両家族の親役割観の変化とそこに関連する事柄、さらに現在の親役割観や性差観に関する述懐が読み取れるように構成し、さらにその大まかな経緯について図案化した(fig.1,2,3)。

### 【家族ごとの結果と解釈】

#### 1. 家族A

##### 1-1 質問紙データ(table1)

家族Aは新婚期より平等主義的な親役割観を有する傾向が見られていたが、育児期において乳児養育役割、手段的役割、表出的役割すべてにおいて「父母ともと同じくらい担うもの」と認識しており、二人とも新婚期よりも明確に平等的な役割観を有するようになっている。また、そのこととあわせ、親役割観の差違は新婚期においても大きくはないものの、育児期においてすべて0となっており、この夫婦の親役割観が平等的なものとして相互に調整されたことを示している。また、親役割観異同のタイプについては、家族Aの夫婦は、平等類似群であり、家庭内性差観の2尺度、

table 1 家族Aの各変数の評定値

家族A		新婚期		育児期	
		Mean	SD	Mean	SD
乳児養育	夫	3.90	0.57	4.00	0.00
	妻	4.00	0.00	4.00	0.00
	差	0.30	0.48	0.00	0.00
手段	夫	4.57	0.53	4.00	0.00
	妻	4.29	0.49	4.00	0.00
	差	0.29	0.49	0.00	0.00
表出	夫	4.00	0.00	4.00	0.00
	妻	3.80	0.45	4.00	0.00
	差	0.20	0.45	0.00	0.00
伝統的労働分業観	夫			2.11	1.05
	妻			2.22	0.44
子育ての性別観	夫			1.60	0.89
	妻			2.40	0.55
共育て意識	夫			4.00	0.00
	妻			3.83	0.41
パートナーからの影響	夫			4	
	妻			3	
親役割観異同	夫			平等群	
	妻			平等群	

すなわち伝統的労働分業観と子育ての性別観のいずれも父母の平等群の平均値よりも低い値を示している。また、子育て意識、パートナーからの影響認識についても高い値を示している。

1-2 面接データ

家族Aの親役割観に関する相互調整プロセスをfig.1に示す。

家族Aの夫婦は第一子出産後共働きを選択しており、夫の育児行動も頻繁に行われていたようである。出産前は「子どもが生まれる前は育児書とかも見ないじゃない。どうするのかがわからないというのもあったし、子どもが生まれたときはそういう(平等で子育てするという)意識はあまりなかったですねえ。」(夫)と述べているように、出産までは特に育児に対して別段主体的なかかわりの態度は持っていなかったようであるが、それが子育てを通じて変化しているようである。

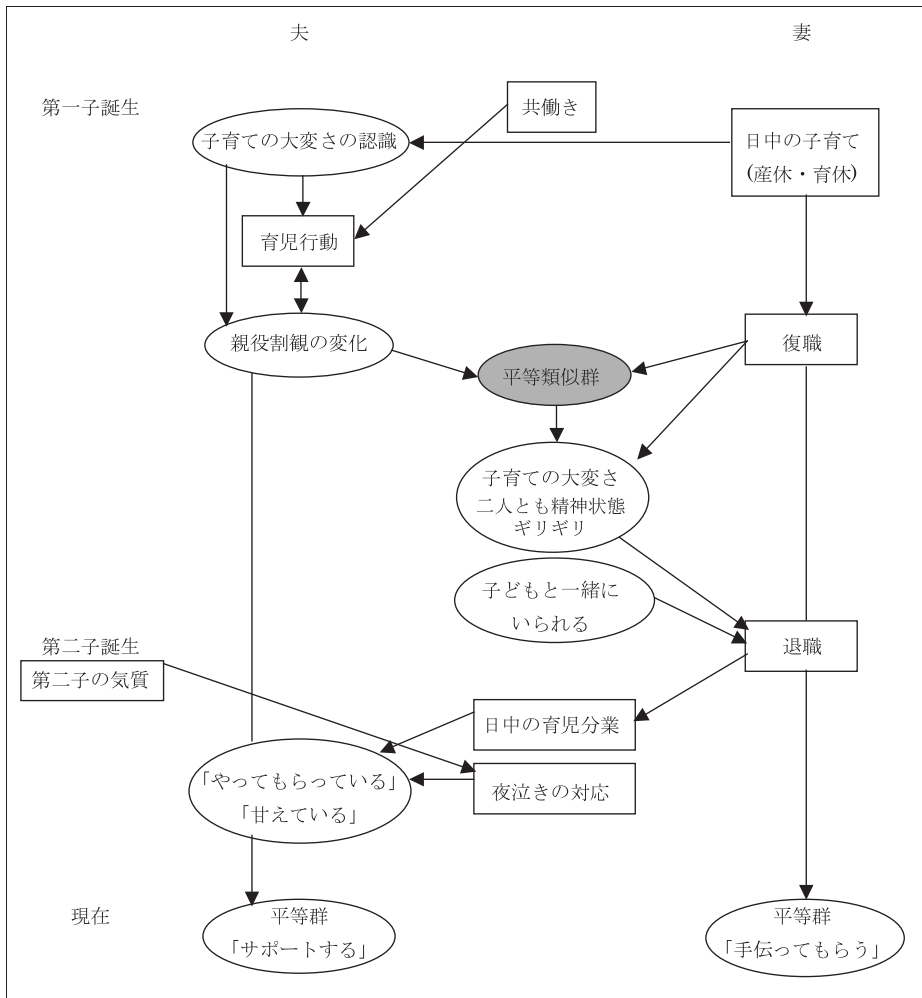


fig.1 家族Aの親役割観の相互調整プロセス

□ は事実、もしくは事実に関する認識、○ は個人の意識や感情の認識を示す

## 家族 A-1

夫：俺も子どもができる前は、あんまり、今ほどそう(平等的に育児すること)は思わなかったけど、共働きしてたこともあったからねえ。それでやっぱり、一人に負担をかけるのはなぁと思ったりして、それで、迎えにいったりね、早く帰ってこれるときは早く帰ってきたりとかして、その辺からイメージが変わったというか、自分の中で子育てする時に自分もやらなきゃいけないんだなぁって思うようにはなったよね。

## 家族 A-2

夫：一人で世話するのってなかなかできないんだよね。生まれたときは、オムツ換えとかも「俺がオムツ換えかやぁ」思ったりもしたけれど、実際にねえ、友人とかもやってるって話も聞いたりしてたし、で、あとは俺もやらなきゃなぁ、っていうかやらなきゃなぁっていうよりもいろいろと忙しいときには手伝うようになるっていうか...やっぱり、見ていると一人でやるのは大変だと思ったからかなぁ。

子どもにかかわるようになったきっかけとして、「共働きをしていたこと」が挙げられ、「(妻)一人だけに負担をかけること」および、「一人で世話をするのは大変」という認識が語られている。こうした中で、家族Aの夫婦、特に夫の親役割観が「父母ともに担うものである」という方向へ変化していったのではないかと考察される。一方、「父母二人で子育て」をするようになったものの、それは子育ての大変さを夫婦で共有するようになっただけであり、「二人生まれたら辞めようって言うのは、一人生まれたあたりから決めてはいたんですね。」(夫)と述べているように、妻の退職を選択することとなっている。

## 家族 A-3

夫：共働きしてた頃って言うのは、若干二人とも余裕がなかった頃って言うのはあったね。

妻：ああ。あった。

夫：で、その子育てするのも、話しがあんまりできないとか、結局夜は会うけど、結局夜は寝かしつけたりとかするだけで、疲れてお互いに寝ちゃったりとか。精神的に余裕がなかったね。それもあって、やっぱり二人目生まれたら辞めようかなって思ったところもあったかもしれない。

妻：そうだねえ、それはあったかもしれない。

夫：それは子育てが大変っていうよりは、その、二人の精神状態のがギリギリみたいになっちゃって、そうした精神状態だから、子どもにもうまくやってやれないんじゃないか、愛情みたいなのをうまく注いであげられないんじゃないかと思ったことはあったかなぁ。そこまでして働くことの意味がどうかなあって。確かに金は取れるってのは魅力ではあったんだけど。

妻：そうそう、正直な話、こう私だけのこととか、親だけのことを考えれば、ホントは仕事は続けたかったというのが正直なところなんだけど。でも子どものこととかを考えると、辞めるのがベストなんだろうなぁって思って。

「精神状態がギリギリ」であったこと、「子どものことを考えると辞めるのがベスト」という認識に基づき、第二子の妊娠にあわせて妻は退職し、日中の時間帯は妻が主な養育者としての役割を担うようになる。そうした中で妻は「細かいことと言えば、オムツ換えとかお風呂というのはもちろんやってもらった方がいいんだけど、なんだろう、気持ちの上で精神的なものの面で支えになってくれば、育児は何とかやっていけるのかなって。」と述べている。また、第二子の気質的な側面が、父母のかかわりに影響を与えていることが、夜泣きの場面の回想において述べられている。

#### 家族A-4

夫：夜、泣くときは第二子なんかは、おっぱいなんだよね。おっぱいを上げると泣き止んだよ。それが俺が起きてもしょうがないって言うことがわかって、それがちょっと申し訳ないなって思うときがある。でも、俺が起きて一生懸命あやしてもいっこうに泣き止まないんだよ。で、ママがやると泣き止むとかっていうのが多いから。そりゃあやっぱりなあ。で、しょっちゅう起きちゃうじゃない？それが申し訳ないなあと思っちゃうかなあ。

妻：でもそればかりはホントしょうがない。

夫：でも、夜起きたりするの、第一子が小さい頃で、共働きしてたところは交互に起きてたの。で、第一子の時はおっぱいってワケじゃなかったから、ちょっとこう。

妻：抱っこしてあやせばね、寝たからねえ。

夫：そう。あやせば寝たからね。俺でも良かったの。今はやっぱり、俺は仕事してるけど、かみさんは仕事してないってことになると、やっぱりかみさんも気を遣ってくれて、別に夜はいいよ。っていってくれて。ま、そこで負担をかけてしまっているっていうのはあるかなあ。でも、俺が起きても泣き止まないから、それも仕方がないかなあって。

この夜泣きに対して母乳という対応策をとらざるを得ない状況に陥り、実際のところ、日中の時間帯において専業主婦である妻が育児の主たる担い手となっていることとあわせて、妻が主なかわりをするようになってきている。そのことについて夫は「申し訳ないなあ」と述べている。それは、また「家のことについても一日家にいてくれると全部してくれてたりしてるじゃないですか、だから結局、掃除とかそういうのは俺がするわけでもなくなったしね、昔の共働きのときはそういうのもあったけど、その辺であれかなあ、甘えてるっていうところはあるかなあ。」(夫)というように、実際の分担の変化とそれについての妻に対して「甘えている」という認識につながっているようである。

このように、妻が専業主婦を選択してから、育児の分担はやや母親に比重が高くなっているようである。しかし、家族Aの夫婦の親役割観は平等類似群であり、その意味では親役割観と親役割行動の実際に齟齬が見られている。その点、「平等」の意味するところについて、家族Aの夫婦は理想として有するものであるが、現状としては「できる範囲でのサポート」であると認識しているようである。



## 家族 A-5

(父母平等に育児をするという考え方について)

夫：「平等にやる」ってゆーのが、

妻：理想かな？

夫：「平等にやる」っていうのが一方にありながら、見てて大変だなんて言うところをサポートしてやるっていうのが、現実で、それが(結果として)平等になってるのかもしれないし、それはちょっとわからないけどね。でもお互い見てるとね、(子どもも二人いるし,)こっちの面倒を見た方がいいだろうとか、そういう思ったときにやるっていうか、俺はそういう感じかな。ま、根本には(平等にっていうのは)あるけどね。やんなきゃいけないっていうのは。でも、だから、「平等」っていうのを意識しているわけではない。ただ、まあ、サポートし切れてないってゆーのがあるかもしれないけど。(笑)

妻：(笑)

(お母さんの方は)

妻：平等という考え方は理想論であって、実際は、形としてはパパが働いて私が家にいるということだから、パパがさっき言ったようなことになるのかな。自分がやり切れていないところを手伝ってもらったりとか。うんー。

夫婦ともに、家にいる妻が主として「見てて大変だなんて言うところをサポートしてやる」(夫)、「自分がやり切れていないところを手伝ってもらったりとか」(妻)というように、夫側のかかわりには「サポート」や「手伝う」といった表現がなされている。しかしながら、夫婦ともに平等でという考え方は「理想」でありまた「根本には」あるという。自分たちができる範囲内で互いがかわりを持つことで平等的な親役割観が維持されていることが推察される。

## 1-3 家族 A まとめ

家族 A の夫婦は親役割観異同において平等類似群に分類され、質問紙 A の親役割観についても育児期を通して「父母同じくらい」と認識するようになっている。この夫婦は新婚期においても比較的平等的な親役割観を有していたようであるが、夫は出産前に「特にそういう意識はなかった」と数量データからは読み取れない質的な変化が起こっていたのではないかと考えられる。特に第一子誕生後において、共働きであったこと、「育児は一人じゃできない」という認識などから、比較的早期に平等群への親役割観の変化が生じているように思われる。また、それは妻の退職後に育児分担に偏りが生じた時点においても、「理想」と「現実」という2つの準拠枠において矛盾せず認識されているようである。

## 2. 家族 B

## 2-1 調査データ(table2)

家族 B は、乳児養育役割は夫が新婚期3.3から育児期に3.1へ、妻が新婚期3.0から3.3へとわずかに変化しており、夫婦で交差する傾向にあるが、その差違は0.9(SD=1.2)から0.4(SD=0.4)と減少傾向にあり、親役割観が相互に調整されている夫婦であるといえよう。その点、育児期の親役割観異同について見ると労働類似群であり、共育で意識もそれほど低くはない。また、夫婦ともに手

table2 家族Bの各変数の評定値

家族B		新婚期		育児期	
		Mean	SD	Mean	SD
乳児養育	夫	3.30	1.16	3.10	0.32
	妻	3.00	1.33	3.30	1.33
	差	0.90	1.20	0.40	0.40
手段	夫	5.29	1.11	4.57	0.98
	妻	4.57	0.79	4.43	0.79
	差	2.14	1.77	1.86	2.04
表出	夫	4.00	0.00	3.60	0.55
	妻	3.80	0.45	3.20	0.45
	差	0.20	0.45	0.80	1.79
伝統的労働分業観	夫			2.78	0.67
	妻			2.22	0.83
子育ての性別観	夫			3.00	0.00
	妻			3.40	0.55
共育て意識	夫			3.50	0.55
	妻			3.00	0.00
パートナーからの影響	夫			4	
	妻			4	
親役割観異同	夫			労働分担群	
	妻			労働分担群	

段的役割は夫婦ともに平等的な方向へ変化しているが、表出役割は母親に比重を高くする方向に変化している。さらに子育てにおける性差については、夫が労働分担群の男性のほぼ平均的な値を示しているものの、妻は労働分担群の平均値よりも伝統的労働分業観で0.43ポイント低く、子育ての性別観で0.29ポイント高い値を示している。

## 2-2 泣き声調査データ(table3)

家族Bでは、夫の泣き声に対する知覚は、新婚期から育児期にかけて高リスク乳児条件、低リスク乳児条件ともに低下している。また、育児期における妻の知覚得点もおよそ平均的な値であった。一方、育児生活へのストレス尺度については、夫婦ともに育児期平均よりも1SD以上高く(c. f. 神谷(1999))、また妻は否定的育児行動も高い値を示している。

table3 家族Bの泣き声に対する知覚と育児ストレス

	家族B夫				家族B妻	
	新婚期		育児期		育児期	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
CryH	5.00	1.72	4.50	1.00	4.06	1.66
CryL	4.56	1.84	4.25	0.95	3.00	1.51
育児生活へのストレス			2.67	0.52	3.33	0.82
育児肯定感			3.00	0.00	2.00	0.00
否定的育児行動			1.67	0.58	3.00	0.00

2-3 面接データ

家族Bの親役割観に関する相互調整プロセスをfig.2に示す。

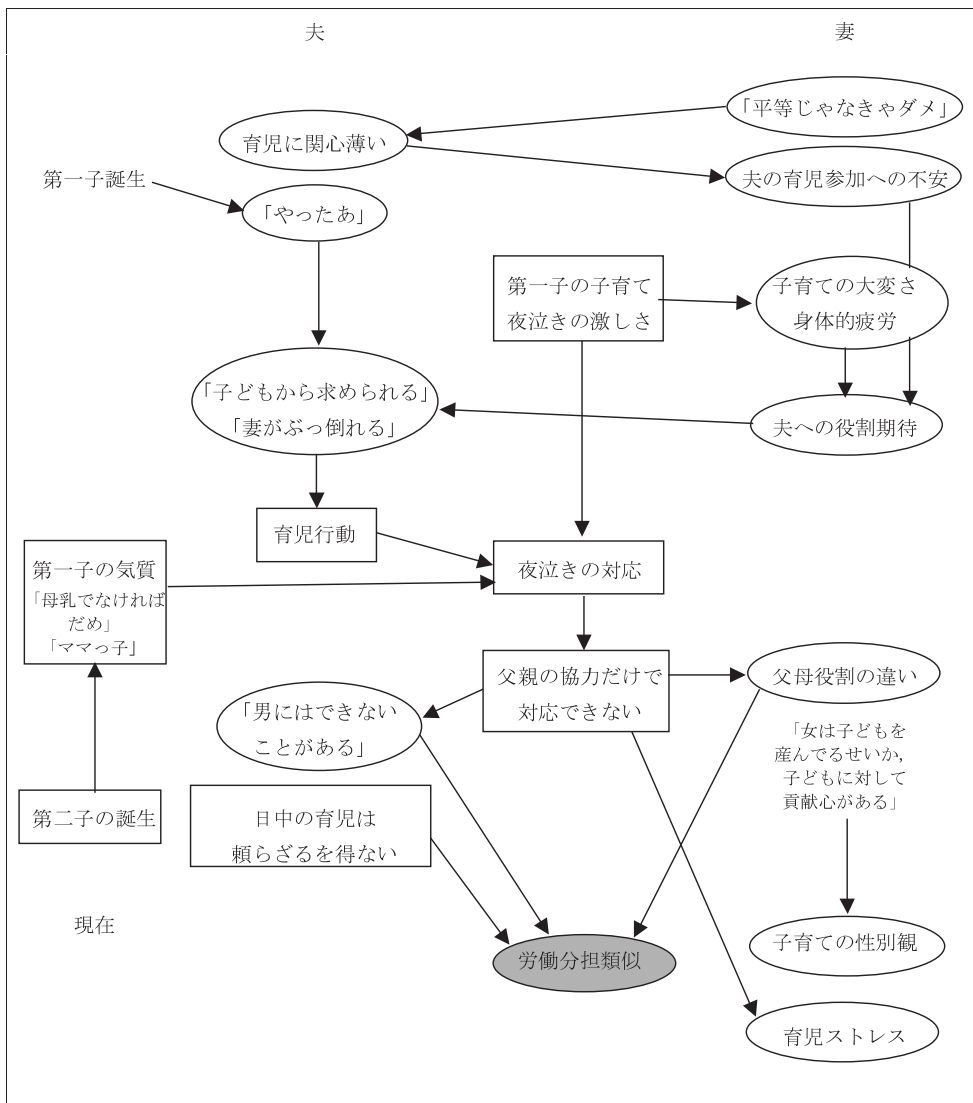


fig.2 家族Bの親役割観の相互調整プロセス  
 □ は事実、もしくは事実に関する認識、○ は個人の意識や感情の認識を示す

第一子が生まれる前の親役割観について「平等じゃなきゃダメでしょ。平等じゃないと。うちの父親が何もやらない人だったから、絶対お前みたいな奴とは結婚しないと心に誓ってましたね(笑)。」と述べる妻に対して、夫は子どもへのかかわりについて、「いや、それ(平等に子育てをするという意識)はないよ。それは考えないでしょう。あー、だって、結婚前はそういう(子育てに関する)話はほとんどしてないよね。」と特にそれほど主体的に子どもへのかかわりを認識していた様子ではなさそうであった。家族B-1では、結婚前の夫の子どもへのかかわりについて語られている。

#### 家族B-1

(子どもにかかわろうという思いは前から持っていましたか?)

妻：ってゆーか(子どもを)あんまり好きじゃなかったと思う。

夫：うん。多分ね。

妻：姪っ子みても、「ホラ、かわいいでしょ」って見せても...

夫：うん、ふーんてな感じで、

妻：はああとか思って。心無いなあとか思って、こいつ大丈夫かあとか思ってね。子どもできてから。思ったぐらいに、興味なかったし、まわりにもいなかったんだよね。

夫：いなかった。

しかし、第一子誕生後の夫の育児行動は、第一子の誕生に際し、「あぁ 生まれたよぉ！って(笑)。やった、そっくりだなあって。」(夫)と感じたことをきっかけとして、妻が「いまは、(夫が)がんばってくれてるからよかったなあと。」と述べるように頻度が高いようである。また、育児行動の要因として夫は、「でも世話するって、子どもから求められるからっていうのはあるよね。面倒系っていかオムツ換えたりとか、どうしてもそういうのは、子どもが求めているものだからね。あぁ、やんなきゃなあっていう感じになるじゃん。」と子どもの要因、そして下記の語りに見られるように、「妻がぶっ倒れる」と妻側の要因を挙げている。

#### 家族B-2

(子どもの世話について)

夫：やんなきゃあ。いや受身の部分もあるよ。やんなきゃあ、絶対に(妻が)ぶっ倒れるだろうとかさ、うーん。

妻：あたしもぐじぐじ言ってるしね。「今日また第一子がさぁ」とか、「二人でさぁ、襲い掛かってきてさぁ、もう倒れそうだから早く帰ってきて」とか(笑)。あたしがそういうからこっち(夫)はもう「早く帰らなきゃあ」「手伝ってあげなきゃあ」と思ってくれているみたいで。

第一子誕生後、夫の育児行動の頻度は高く、それが子育て意識の高さに表れているのであろう。また、上記にある「子どもに求められる」「(妻が)ぶっ倒れる」ことについて、子どもの気質的な問題が大きく関連しており、夫婦二人でかかわらなければ乗り越えられないとの認識もあるようである。

## 家族B-3

妻：第一子だけのときはほんとに私がぶっ倒れてた。第一子がぜんぜん寝てくれなかったから、(夫が)一時間ぐらい抱っこでこの辺散歩して、第一子がやっと寝たよあって置いたら泣いたとかね。

夫：あったねえ。

妻：なんかそんな感じだったよねえ。だから、パパも、もう手がパンパンっていう感じだったもんね。

夫：あったねえ。

妻：だいが散歩してくれたよね。抱っこしてね。

一方で、第一子については、「第一子はすごいママっ子だったんだよね。だから離れられない。」(妻)「ママのぬくもりが大事で、一緒に眠っていればそこそこ落ち着いて眠るけれど、ママがいないと、キーンって泣き出して。」(妻)と述べられており、子どもの気質的な側面から、父親の協力だけでは対応できないとの認識がなされている。

## 家族B-4

妻：ずっと夜泣きだよ。夜泣きというか、おっぱいあげたときはおっぱいを求め、3時間おきぐらいに夜ずっと起きてて、おっぱいやめてからも、やっぱ名残だよ。わんって泣いて、とりあえず、3時間おきではなかったしね。とりあえず、ママのぬくもりが大事で、一緒に眠っていればそこそこ落ち着いて眠るけれど、ママがいないと、キーンって泣き出して、離れて15分とか30分でまた泣いて、寝かしつけて、離れてまた泣いての繰り返しでみたいな...

## 家族B-5

夫：第一子は、まったくミルクは受け付けなかったから。

妻：乳首がうけつけなくて。

夫：そうそう。うけつけなくて。なんどかトライはしたんだけど。

妻：だからミルクじゃなくても、ジュースでもだめなんだよね。

夫：うん、だから、ミルクというか、おっぱいに関しては、これはダメだなっていう感じだったですね。第一子はね。

妻：第二子は、なんとか飲んでくれるけど、第一子はぜんぜん。

夫：もうぜんぜんだめだったね。父親(の協力)もなにもなかったよね。

家族Bの夫婦に育児は平等にという考え方について尋ねたところ、夫は「週5日は働いているから、そこはある程度、帰ってきてからって言うとなんかに限られた時間になるから、普段の日中というのは頼らざるを得ないというところはある。」と、時間配分について述べるとともに、「男にはできないことがあるから、おっぱいをあげるとかね。そういうできないことはあるから。そういう中で、なにがやれるかとかがそういう感じじゃないかなあと。」と「男にはできないことがある」と述べている。片や、妻も「ちょっとは母親にしかできないことってある」と述べ、夫婦ともに父母役割の違いについて言及している。

## 家族B-6

妻：やっぱりちょっとは母親にしかできないことってあるんじゃないかなあっとは思う。(父親でも)できるっちゃあできるけど、でもねえ、やっぱりこういっちゃなんだけど、男はやっぱり自己中なところがある。で、結構、女はやっぱり子どもを産んでるせいとか、貢献心があるっていうか、子どもに対してね。うん。こう一般的におもちゃをあげたら愛情でしょ、って片付ける男性もいるし。でもやっぱり女性はそれだけではない。違うんじゃないかと。よっぽど(男性が)女性のように子どもを育てるって言ったら、よほどの覚悟がいると思う。

こうした父母役割の違いについての認識は、先に見た、父親の協力だけで対応できないことと関連しているのではないかと考えられる。また、妻が専業主婦であることから、夫が「日中の育児は頼らざるを得ない」と述べているように、日中の育児を妻が担っていることから、夫婦ともに親役割観が労働分担群となり、相互に調整されているのではないかとと思われる。また、父親の協力だけで対応できないという状況は、母親の育児ストレスの高さに関連しているであろう。

## 2-4 家族Bまとめ

家族Aの夫と同様、家族Bの夫も出産前の育児参加について「それは考えないでしょう」と親役割観が出産後に質的な変化を起こしているのではないかと推察される。特に、第一子誕生後は「子どもに求められる」「妻がぶっ倒れる」という認識の中で、妻が「だいぶ協力的」と述べている様に、子どもへのかかわりをとっているようである。このことは、夫の泣き声の知覚が新婚期に比してネガティブでなくなっていることとも関連しているであろう(神谷, 2002)。しかしながら、夜泣きへの対応において「母乳でなければダメ」というように「男にはできないことがある」という認識を夫は有し、また「日中の育児は頼らざるを得ない」こと、さらに第一子が「ママっ子」であったことなどが、夫婦双方の子育ての性別観を高めるとともに、この夫婦の親役割観異同が労働分担類似になっているのではないかと推察される。また、この「母親でなければダメ」という認識は、現在の妻の育児ストレスの高さとも関連しているものと考えられよう。

## 3. 家族C

## 3-1 質問紙データ (table4)

家族Cは、親役割観の調査(神谷・菊池, 2004)に育児期(第一子1歳時点)で協力が得られており、今回の結果と対照させることで、育児期になってからの変化が確認される。特徴的なのが乳児養育役割において夫が3.9、妻が3.8、とほぼ平等的な位置であったが、育児期においては、夫2.8、妻3.8と妻に変化が見られない一方で夫の親役割観が母親に比重を高くする方向に変化していることである。また、育児期の差違は0.9(SD=0.32)であったが、父親の変化にともない育児期では差違が1.6(SD=1.71)と大きくなっており、神谷・菊池(2004)でみられた総体的な親役割観の変化と同様の傾向を示している。また、親役割観異同は夫が労働分担群、妻が父母分担群であり、父親平等群であるといえる。子育てにおける性別観については、伝統的労働分業観、子育ての性別観ともに妻の方が夫よりも低く、また、父母分担群の平均値よりも1SD以上低い値を示しているのが特徴的である。また、共育て意識は夫で2.83、妻で3.0であり、パートナーからの影響も夫婦ともに低い値ではなかった。

3-2 泣き声調査データ (table5)

家族Cにおいては、泣き声の知覚に夫婦とも特徴的な点がある。まず、夫については、新婚期よりも育児期の方がネガティブに泣き声をとらえるように変化しており、また、妻では高リスク乳児条件よりも低リスク乳児条件の方がよりネガティブに知覚していることが示されているのである。育児ストレス尺度については、夫婦ともに平均的な値を示していた。

table4 家族Cの各変数の評定値

家族C		新婚期		育児期	
		Mean	SD	Mean	SD
乳児養育	夫	3.90	0.88	2.80	0.79
	妻	3.80	0.42	3.80	0.42
	差	0.90	0.32	1.60	1.71
手段	夫	4.29	0.49	4.43	0.53
	妻	4.71	0.95	4.43	0.79
	差	0.43	0.53	0.57	0.53
表出	夫	3.60	0.55	3.60	0.55
	妻	3.40	0.89	3.80	0.45
	差	1.40	1.52	0.60	0.55
伝統的労働分業観	夫			2.67	0.50
	妻			2.33	0.87
子育ての性別観	夫			3.00	0.71
	妻			1.60	0.89
子育て意識	夫			2.83	0.41
	妻			3.00	0.63
パートナーからの影響	夫			4	
	妻			3	
親役割観異同	夫				労働分担群
	妻				父母分担群

table5 家族Cの泣き声に対する知覚と育児ストレス

	家族C夫				家族C妻	
	新婚期		育児期		育児期	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
CryH	2.69	0.77	3.88	0.43	2.88	1.30
CryL	2.56	0.77	3.50	1.31	4.06	1.92
育児生活へのストレス			2.00	0.63	2.17	0.98
育児肯定感			2.75	0.50	2.25	0.96
否定的育児行動			2.00	1.00	1.67	0.58

3-3 面接データ

家族Cの親役割観に関する相互調整プロセスをfig.3に示す。

第一子の誕生について、夫は「生まれたときは、まあ、かわいいなあって思うだけで、それで心境がなにか変わるってことはなかったですね。普通に淡々と。うん、それでなにか人生観が変わるってことほどのことはなかったですね。」と述べ、また親役割観の変化についても、「いやあ、変わん

ないなあ。変わってないと思いますよ。」と述べている。また、育児分担の実際については、「まったくやっていないというわけじゃない」ものの「そんなに多くはない」と語っている。

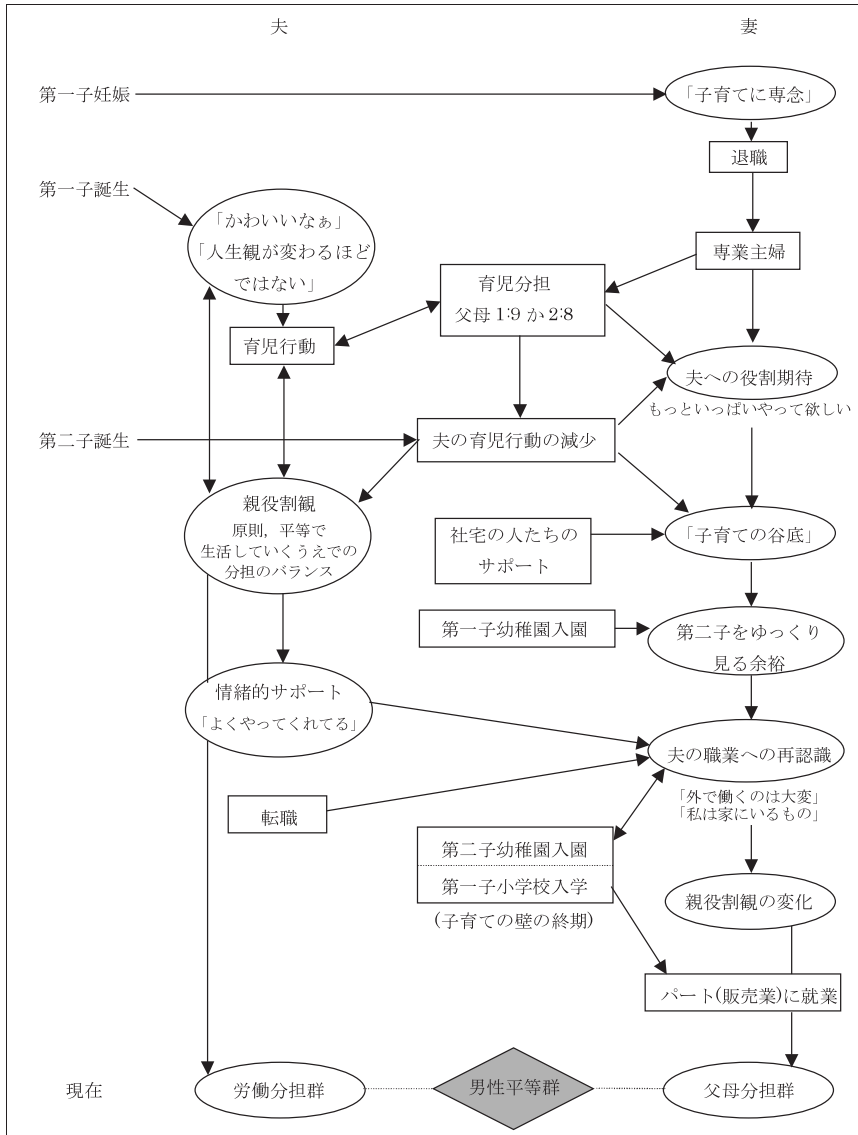


fig.3 家族Cの親役割観の相互調整プロセス

□ は事実、もしくは事実に関する認識、○ は個人の意識や感情の認識を示す



## 家族C-1

夫：世の中一般でいわれるとどうかわかんないですけど、まったくやっていないというわけじゃなくて、おむつを換えたりはしたこともあるし。お風呂に入れたりとかもしてたし。ただ、そんなに多いということはないでしょうね。例えば、比率が半々かかっていうと、半々ではないだろうし、そういう意味で言うと、2：8とか、1：9とか。

妻：ああ、あたってらう...

夫：なに？(笑)

妻：いや、私は今、1：9か2：8だろうって。(笑)

夫：(笑)。まあ、それくらいの割合かな。っていう感じですね。

また、第二子誕生後の分担についても「割合的には、そんなに変わりはないけれど、やや一人目よりは減っているかなあって。」(夫)と述べている。こうした状況は家族Cの夫の職務状況や関与の度合いと関連しているものと思われるが、それは同時に第一子誕生後にも「心境がなにか変わってことはなかった」こととも関連しているようである。家族Cの夫は平等で子育てという考え方について、次のように語っている。

## 家族C-2

(父母平等に育児をするという考え方について)

夫：いや、だから基本はそのとおりだと思いますよ。原則は。後は、生計を維持する部分もあるわけで、そこのバランスでしょうね。当然家族なので、お互いに助け合っていくんだけど、その中で、子育てだけがすべてじゃないですから、生活していくうえでどのように分担していくかっていうことだと思いますね。

平等で育児をすることについては「基本、原則」であり、家族で「お互いに助け合ってバランスをとることが重要であると述べられている。特に、「子育てだけがすべてじゃないですから、生活していくうえでどのように分担していくか」という認識は、「生計を維持する部分」をも含めて、「家庭生活をどのようにプランニングしていくか」という見通しをも含んでいるのではないかと解釈されよう。

一方、妻は当時を振り返って、「最初の方ももっといっぱいやって欲しいとは思っていましたが、(家族C-4)と述べており、当時の夫への役割期待が果たされていなかったことが示されていよう。それは、第二子の誕生後、第一子が幼稚園に入園するまでの時期を回想して、妻が「なんか一番谷底でしたね。子育ての谷底。(笑)」であり、「常に大変だった」と述べていることと関連しているように感じられた。

## 家族C-3

妻：大変だった頃は、なんか、家にいるのも辛い。辛かった。常にまわりつかれて、なにもできないし、だったら外に連れ出したほうがまだいいんだけど、外でもやっぱりちょろちょろして大変だし、目を離せないし。もう、なんか、戻りたくはないですね。あの頃に。

「常に大変」であったと当時を振り返り、今は「もう、なんか、戻りたくはないですね。あの頃に。」と述べている。また、「なんか、一時間でいいからひとりになれる時間が欲しいなって思ったこともありますけど。」(妻)とも述べてもおり、当時の育児状況の厳しさがうかがえる。なお、この時期には、「ちょうどそのとき社宅だったので。その社宅でみんなよくしてくれたので、かなり助かって、精神的には。」(妻)というサポートについての言及もされていた。

この「子育ての谷底」は第一子が幼稚園に入園することによって、「やっぱり幼稚園に行っている間、下の子と二人だけだからすごい楽でした。楽っていうか、下の子に手がかけられるようになったのでそれが良かったですね。」と第二子にゆっくりとかかわるような余裕が現れてきた中で少しずつ変化してきたようである。

#### 家族C-4

(平等で育児という考え方について)

妻：うん。そうですねえ。やっぱり(夫と)同じく。平等だといいいんですけど、やっぱり(夫は)お仕事に行ってるし、外で働くのは大変なので。で、私はずっと家にいるものだし、やっぱりそこは、私が自分の仕事として。で、手が空いていればやってもらえたらなって最近はある。でも、最初の方はもっといっぱいやって欲しいとは思っていましたが、でもなんか、だんだんやっぱり、外で働いてくるのも大変なんだなってことがわかってきて。今は、気が向けばやって欲しいというぐらいですねえ。

「最初の方はもっといっぱいやって欲しいとは思っていましたが」けれども、「だんだんやっぱり、外で働いてくるのも大変なんだなってことがわかってきて。」と夫の職業に対する認識が変化をして、「私はずっと家にいるものだし、やっぱりそこは、私が自分の仕事として。」と母親役割を受容している旨の発話がなされている。このことは、親役割観について「変わってないですねえ」と述べた夫と対照的であるといえよう。

一方、父親は妻に対して「いや、よくやってくれていると思いますよ。偉いな。がんばってるなって。思ったよりもしっかりしてるなと思いましたね。」「うーん。女の人は偉いなあと、いや、しっかりしてるなあとと思う。そういう意味でいうと子育てで言うと、体力もあるし精神力も強いし。よくがんばっているなと思います。それは予想以上。」と認識しており、妻に対する情緒的なサポートがなされていたことが推察される。

#### 3.4 家族Cまとめ

家族Cの夫婦は質問紙Aにおいて育児期(第一子が1歳時点)で協力が得られていたが、数量データのみ見ると、神谷・菊池(2004)で見られたような乳児養育役割の差違を大きくする方向に変化しており、また、夫も新婚期に比べ乳児の泣き声をネガティブに知覚するようになっていた。このことから家族Cの夫が親役割観について「変わっていないですね」と述べ、また第一子の出産についても「特に人生観が変わるほどではなかった」と述べていることなどから、「生活していく上での分担のバランス」という親役割観は育児期を通してそれほど大きくは変化していないのではないかと考えられる。一方、家族Cにおいては、妻の親役割観の変化が顕著であり、「外で働くのは大変」であり「私は家にいるもの」と父母分担群的な親役割観を有するに至っているものと思われる。そのきっかけとして、「子育ての谷底」と語られていた時期を過ぎてゆとりがもてるようになって

たこと、そして調査時点では第二子も幼稚園に入園し、パートに出るようになってきていることなどがあげられるのではないだろうか。さらに、今回はこの家族Cも第二子が4歳代であったため、育児期として分類されているが、この家族Cではすでに親役割観の相互調整を最も必要とする時期を通り過ぎてしまったのではないかという可能性が考えられよう。それは、乳児の泣き声に対する妻の知覚が低リスク条件のほうが高かったことや、親役割分担や子育てに関する語りの多くが過去形で語られていたことや、「もう忘れちゃったなあ」などといった語りからも充分想定できる。特に、乳児養育役割は0歳代における役割分担を想定していたことから、この育児期を終わろうとする時期において、夫婦の親役割観の差を検討することの意味を再考すべきかもしれない。

また、今回の3家族の中では家族Cのみが夫婦で親役割観が異なっており、男性平等群に分類されていた。神谷(2004)では、親役割観が類似している夫婦では共育て意識が類似している一方、親役割観が異なっている夫婦では共育て意識に食い違いが見られていた。しかし、食い違いが見られる夫婦においても、夫婦でより伝統的な分担観を有する方がパートナーからの影響認識を高くしている場合、その共育て意識も高いことが示されていた。この家族Cの妻も、パートナーからの影響認識が3、共育て意識が3.0(SD=0.63)と決して低い値ではない。このことは一つに親役割観が異なる場合でも、夫婦関係を維持するためにパートナーからの影響認識が補償的に機能していることの証左ではないかと考えられる。

## 【全体的考察】

### 親役割分担の実際と「平等」認識

今回の対象となった3家族はいずれも、第二子誕生後の時点で妻が専業主婦となっており、日常的な子どもの養育を主に母親が担うようになっている。そうした状況の中、「平等」ということについて、家族Aの夫婦は「平等が理想であって、実際はできるところをサポートする」と理想と現実の違いについて折りあわせを付けているようであった。一方、家族Bの夫は「週5日は働いているから、普段の日中というのは頼らざるを得ないというところはある。」と、育児時間を基準とした判断基準を用いているようである。また、家族Cの夫は、扶養役割までを含めたトータルバランスを念頭においており、妻はそうした夫とのかかわりの中で、父母分担的な親役割観を受容しているようであった。

### 親役割観の変化

また、今回対象となった3家族について、出産前から調査時点までに親役割観が変化したことについて直接的に語られていたのは、夫婦のどちらか一人だけであったことに着目したい。家族Aと家族Bでは、出産前を回想して「子どもが生まれたときはそういう(平等でやるというような)意識はあまりなかったですねえ」(家族A夫)、「いや、それはないよ。それは考えないでしょう。」(家族B夫)と、特に子育てに対する主体的な意識というようなものはなかったと語られている。それらが、「一人で世話するのってなかなかできないんだよね」(家族A夫)や「子どもに求められる『妻が倒れる』(家族B夫)といった認識の中で変化してきたのではないだろうか。一方、家族Cの夫は「変わってないと思いますよ。」と述べているが、妻が「最初の方はもっといっぱいやって欲しいとは思っていましたが、でもなんか、だんだんやっぱり、外で働いてくるのも大変なんだなっ

てことがわかってきて。今は、気が向けばやって欲しいというぐらいですねえ。」というように、夫への親役割期待に変化が生じているようである。

#### 「父母の違い」に対する認識と子どもの気質

夫の親役割観に変化が見られた家族AとBであったが、これらの夫婦を対比するとき、きわめて顕著な差異は子育ての性別観が家族Aでは相対的に低く、家族Bでは相対的に高いことであった。この点については、第一子の夜泣きへの対応に関する語りにおいて、子どもの気質的な差が関連している可能性が示唆された。家族Aでは第一子は「あやせば寝たからね」というよう状況であり、父母双方が対応し、夫の対処も可能であったことが語られていた。しかし、家族Bでは、「第一子はすごいママっ子だったんだよね」と述べられているように、夫の対処ではなかなか対応できなかったことが語られており、ここに子どもの気質差が夫婦の親役割観に影響を及ぼしている過程が推察されよう。また、家族Aにおいても、第二子の夜泣きは母親でなければ対処できないと述べられているが、このことは妻が退職したこと、夫が「負担をかけてる」と認識することで、直接的に親役割観が変化するような影響を与えていないことも着目すべきかもしれない。

#### 子育て期の壁

今回対象となった3家族に共通するものとして、「二人とも余裕がなかった」(家族A-3夫)、「もう倒れそうだから早く帰ってきて」(家族B-2妻)、「戻りたくはないですね。あの頃に」(家族C-3妻)といった語りに見られるように子育ての大変さへの言及が挙げられるだろう。0～3歳の第一子を持つ母親を対象に育児ストレス尺度を測定した加藤(1999a, 1999b)によると、育児生活のストレスは年齢によって差は見られないが、0, 1歳に比べ育児肯定感は3歳時で低く、0, 1歳よりも2, 3歳においてより否定的育児行動が高いこと、また、2, 3歳時には第二子が誕生しているケースが見られ、子どもが複数いるほうが育児生活のストレスも否定的育児行動も高いことが示されている(加藤, 1999a)。このことは、家族A, Bがまさに子育ての大変な時期の渦中にあり、家族Cはそれを乗り越えた時期と見て取ることもできるだろう。さらに、2, 3歳時点の育児ストレスの各尺度に、子どもの扱いにくさや父親サポートが関連していること(加藤, 1999b)は、家族A, Bともに父親のサポートが得られてはいるのだが、特に家族Bにおいて子どもの扱いにくさが育児ストレスに影響を与えていることと対応しているであろう。

この子育ての大変さについての語りを見てみると、家族Bのみ現在形で語られており、家族Bの妻の育児ストレスの高さにも現れているように、調査時点でまさに「大変な子育て」が進行しているところであったとも考えられる。そうした意味では、面接場面においても家族Aと家族Cにはある特定の「大変さ」を乗り越えたかのような印象を受けた。このことは特に、家族Cにおいて、親役割観の相互調整を最も必要とする時期を通り過ぎてしまったという可能性とも関連する。夫に対してもう少し育児や家事にかかわって欲しいかという問いに対して、子どもが小学生の場合「小さいときはもっとと思った。今は子どもの手が離れたから」という理由でほとんどが満足していた(福丸, 2000)というように、親役割の齟齬が問題となるのは、まさに親役割行動が必要とされる育児期であり、中でも幼少の子どもがいる家庭であろう。その意味では、大変だった子育て期を通り過ぎてしまった後には、夫婦の親役割観異同はまた、それとは異なる関係性の問題へと収斂されていくのではないかと考えられ、家族Cの妻がパートナーからの影響認識と共育意識をそれほど低くは認識していないこととともに、家族Cで親役割観が異なっていることは現在の家族において特に大

きな問題ではないのかもしれない。

#### 柔軟になるということ

さらに、今回の3事例において共通していたことは、子育てにおける「男女平等」という考え方に対して異議を述べる対象者が一人もいなかったことが挙げられる。それは社会規範としての男女共同参画を今回の調査対象者が認識していたことを意味していると考えられる。しかしながら、先に見たように、第二子の誕生以降は3家族とも妻は専業主婦という役割を採択しており、実際の育児場面において「父母が量的にも質的にも均等に子どもに関わること」はあまりにも仮想的すぎる状況であろう。そうした中で、「理想論としてあって実際には…」と社会的規範と家庭内の実情とを分けて述べていた家族Aや、父母分担群に分類されていながら、家庭内性差観の2尺度が平等群と同等の評定値を示していた家族Cの妻などには認識の柔軟さを印象として受ける。

柏木・若松(1994)によると、親になることによる人格発達の中に、「柔軟さ」の因子が示されているが、これには、「考え方が柔軟になった」や「他人に対して寛大になった」「精神的にタフになった」などの項目が含まれており、父親よりも母親の方が、また母親でも育児の制約感が弱い方が、制約感が強い母親よりも高く認識していることが明らかとなっている。今回家族B、Cの妻についてみると、家族Bの育児生活のストレスは高く、また家族Cの妻はそれほど高くなかったことを見ると、家族Cの妻の「だんだんやっぱり、外で働いてくるのも大変なんだなってことがわかってきて。」という認識はまさに親になったことの柔軟さのあらわれではないかと考えられるのである。また家族Aの夫婦が、平等に対する認識の準拠枠として、「理想」と「現実」という2つの準拠枠を示していたことも、この柔軟さのひとつであるように考えられ、それゆえ、実際には母親に比重を高くする育児行動であっても、互いに平等群を維持しているのではないかと考えられる。

#### まとめと今後の課題

以上、本研究では3事例ではあるが、追跡的な数量データと半構造化面接による質的データの両側面から育児期移行における親役割の夫婦間相互調整について検討を試みた。その結果以下のような示唆が得られた。1) 親役割観の相互調整は夫婦どちらか一方の役割観へと他方が修正を加え、変化する傾向、すなわち、家族AやBのように平等的な親役割観を有する妻に、夫の親役割観が平等的になったり、家族Cの妻のように夫に平等的な役割を期待しつつも、それが果たされない中で父母分担的な親役割に変化したりするのではないかとということ、2) 親役割観の相互調整について、子どもの気質的な差違が関連すること、3) いずれの家族においても、「子育て期の壁」が存在し、そこを乗り越えることが夫婦の親役割観の調整において大きな山場となること、そして、4) その山場を越えてしまった後には、親役割観の異同は夫婦にとって大きな問題ではなくなってしまうこと、特にそこでは親役割観の異同にかかわらず、「親になる」ことによる人格発達としての「柔軟さ」が関連するのではないかとということ、などが推察された。

今後はこれらの推察と、今まで得られた知見に基づき育児期移行における親役割観の相互調整についてモデル化し、さらなる量的・質的データによる縦断的なアプローチでモデルを検証する必要があると考えられる。特に質的な検討は今回初めて各家族1回のみ面接で得られたデータであり、そこで語られたことだけでなく、「語られなかったこと」(山口, 2004)にも配慮し、数回の面接を行うことによって今後検討を進めることが重要であろう。

## 【謝辞】

度重なる調査にもかかわらずご協力を快諾していただいた3家族のご夫婦に感謝申し上げるとともに、ご家族のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。また、本調査にあたりご指導賜りました東北大学大学院教育学研究科の菊池武剋先生に深甚の感謝を申し上げます。

## 【参考文献】

- Arksey,H & Knight,P. 1999 Interviewing for Social Scientists. Sage Publications.
- Chess,S. & Thomas,A. 1980 The Dynamics of Psychological Development. Brunner/Mazel publishers.
- Chess,S & Thomas,A 1984 Origins and evolution of behavior disorders from infancy to early adult life. Harvard University Press.
- 福丸由佳 2000 乳幼児を持つ親の多重役割と抑うつ度との関連 父親を中心としたインタビューによる調査結果から . 人間文化論叢,3,133-143.
- 神谷哲司 1999 乳児の泣き声に対する親の認知と対処行動. 家族心理学研究, 13(2),103-114.
- 神谷哲司 2002 乳児の泣き声に対する父親の認知. 発達心理学研究, 13(3),284-294.
- 神谷哲司 2004 育児期夫婦における親役割観の異同と子育て意識の関連. いわき短期大学研究紀要, 37,1-24.
- 神谷哲司 2005 親役割観の形成と変化に関する研究 育児期家族を中心に . 東北大学大学院教育学研究科博士論文(未公開).
- 神谷哲司・菊池武剋 2004 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化. 家族心理学研究,18(1), 29-42.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親になる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究,5,72-83.
- 加藤道代 1999a 育児初期の母親の養育意識・行動とサポート資源 国立婦人教育会館研究紀要,3,53-59.
- 加藤道代 1999b 育児初期の母親の養育意識・態度に関わるサポート要因の検討 東北大学学生相談所紀要, 26,1-10.
- 加藤道代・津田千鶴 1998 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討.小児保健研究, 57(3), 433-440.
- 佐藤郁哉 1992 フィールドワーク 新曜社
- 鈴木淳子 2002 調査的面接の技法. ナカニシヤ出版.
- 氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房
- やまだようこ 1995 理論研究をまとめるために 発達心理学研究,6(1),72-74 .
- 山口智子 2004 人生の語りの発達臨床心理 ナカニシヤ出版

(2006年1月10日受付,2006年1月19日受理)